

つゝじヶ丘だより東京

つゝじヶ丘同窓会東京支部会報

発行 北海道函館西高等学校
つゝじヶ丘同窓会東京支部
東京都府中市朝日町2-30
会長 新谷 義克
☎042 (361) 9419

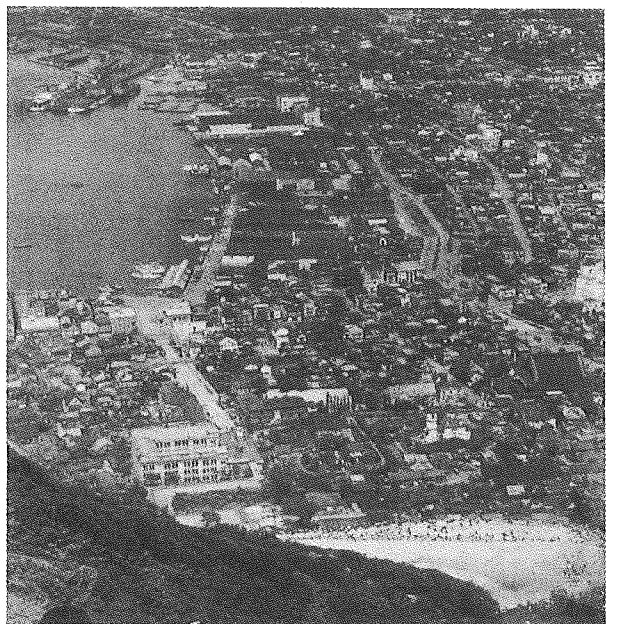
編集 高橋 順吉 (西高17回)
印刷 ㈱サン・プリント

東京支部会報 発行に寄せて

東京支部会長 (西高1回) 新谷 義克

西高つゝじヶ丘同窓会東京支部が結成されて以来念願だった会報の第一号が今度発行されることになりました。思えば、庁立高女の同窓会と西高同窓会が初代会長の中川巴様や西高同窓会事務局長だった亀谷彰夫君方の努力で合併し西高つゝじヶ丘同窓会東京

支部として発足してからすでに二十年がたちました。その間隔年に開かれた総会には毎回三百数十名以上の同窓の皆様が参加され多感な青春時代を過ごした庁立高女や西高の思い出を語り旧交を温め合ってきましたが、母校や日頃の旧友達の情報が今いち得られないという思いがありました。それが今度、母校や仲間の動静を伝える会報が幹事の皆さんの努力で発行されることになり、御同慶の至りで編集にあたる方々に心より感謝致します。



昭和28年

つゝじヶ丘同窓会 会報発行に寄せて

函館本部長 (西高8回) 藤岡 憲三

この度はつゝじヶ丘同窓会東京支部総会が第十回を迎えましたこと心よりお祝いと感謝の意を表したいと存じます。

各支部も年々参加者も増え、まとまりの強いものに発展して参っておりますこと関係各位に心より敬意を表しますと共に厚く御礼申し上げます。大きな支部といたしましては、札幌、仙台、東京、大阪とございますが一番ビック

な支部は東京支部でございます。して、これだけ大きな支部を現在のようにまとめて参るには大変なご苦労があった事と思ひ、新谷義克会長はじめ幹事の方々のご苦労に改めて敬意を表しますと共に厚く御礼申し上げます。

東京支部は二年に一度の開催ですので現在のようなまとまった型になって満二十年になつた事になると思ひます

が、私も二十年以上前かと思ひますが有楽町の「ニュー東京」にて開催された東京支部

総会に同期生十名程で参加したことがありましたが、当時は高女のお姉様方が多数を占め会長も女性であったように記憶しておりますが「お兄さん方」は西何回生ですか、など質問を受けたり多少冷やかされたり可愛がられた様な懐かしい思い出があります

が、本部をはじめ全国的に高女のお姉様方が減少してきてしまつて殆どの支部は新制西高の方で運営されているのが現状と思われれます。

さてここで本部の現況に多少触れさせていただきますが、卒業生数は高女が明治四十二年第一回修了生から第四十一回修了生迄六千九百三十

名、女子高が二年間あり一回生、二回生合わせて二百二名、西高校卒業生数が第一回から本年春の五十三回生迄二万六千四百一名、定時制は昭和二十六年から平成七年閉課迄千九百二十三名の卒業生を数え今春迄の総数は三万五千四百五十六名の実に多くの方々が巣立っていったことになりまふ。多方面で御活躍されておられますにビックな同窓会となっております身の引き締まる思いもいたします。

最近では少子化の影響もあり割り当ての間口も減少してきており公立高校の統廃合も叫ばれており我が西高がこのまま存続していきけるのか多少

心配になってきております。今です。

歴代校長は初代鈴木源二郎校長から現在の鳥居大路勝廣校長迄二十六代目となり歴史の長さが感じられます。以上本部の状況を説明させていただきましたがいよいよ二年後に百周年を迎え本部としても種々準備に取り組んでおりますが、東京支部の皆様にも是非多数のご参加と色々な場面でのご協力いただきませう重ねてお願い申し上げます。

東京支部の益々の御発展と末永い御繁栄を御祈念申し上げます。

同窓生と共に 新たな西高(つくし)へ

函館西高等学校長(第26代) 鳥居大路 勝 廣

つゝじヶ丘同窓会東京支部
総会の開催、心からお祝い申
上げます。

皆様には、日頃から本校の
教育活動推進にご支援・ご協
力心から感謝申し上げます。

私も本校に勤務二年目を迎
え、函館そして本道における
西高の果たす役割の大きさを
痛切に感じております。本道
発展に果たした函館の役割の
大きさのように、元町の歴史、
伝統・文化、景観・自然など、
今求められる確かな学力、豊
か

かな心を育む教育環境を有し
ている函館西高校として、「特
色ある信頼される高校づく
り」を目指し、世界に羽ばた
く生徒の姿を夢に、関係各位
のお力をお借りし教職員一丸
に努力しているところでありま
す。同窓生の皆様には、ご指
導・鞭撻のほど宜しくお願い
いたします。

さて、今回、原稿依頼のお
話をいただきましたので近況
をお知らせし、ご挨拶に代え
させていただきます。本年度
の学校教育推進の方針
は、「生徒の夢を実現す
る特色ある学校づく
り」とし、生涯にわた
り自己実現を図ってい
くことのできる能力や
態度を育て、校訓であ
る「志高く」のもと理
想や真理の探究、情操
豊かで思いやりや公德
心をもち感性を磨くこ
とのできる生徒を育て
ることであります。

昭和初期

現在、二学期四期制
を生かした事前・事後

指導の充実を図る学習体制を
とり基礎学力の向上を図り授
業の充実にも努めております。
また、衛星回線によるサテラ
イティング進学講座の導入、
各種休業日講習、一週間のイ
ンターシッピング事業、高大連
携による英語教育、函館市国
際交流センターと連携しての
外国人の人達との茶道(本校高
女時代の卒業生、鈴木勇子講
師による)、書道、剣道のほ
か、吹奏楽、球技系スポーツ
などによる国際交流教育、管
内に誇れる情報教育の推進、
さらに本年度、本校を中心
に道南支店高文連文芸部を設立
し、函館市文化・スポーツ振
興財団と共催し「青春海峽文
学賞」と命名し、道南各加盟
校より五部門で作品を募集し
表彰するもので、作家の講演
会も含め、文学に親しむ機会
を多く設け、「かつて海峡を隔
てたかの地へのあこがれが、
多くの若者を育てたように有
為な人材が育つように」との
願いを込めたものであり函館
に文学の再現を期待している
ところでもあります。また、本
校の特色をより一層深めるた
め、保護者、地域の期待と信
頼に応える学校として、本校
教員を講師に「つゝじヶ丘学
校開放講座」と名称を付け、

九月から十一月にかけ、教員
数二十一人、十四講座を開設
するよう進めております。
つゝじヶ丘の名称は、同窓会
をはじめ、生徒会主催の学校
祭の名称として地域の多くの
人達に親しまれており、開放
講座の名称にしました。本校
教職員一同、魅力溢れる学校
にするため懸命に努力してい
るところであります。平成十
七年度で百年を迎える本校で
すが、これを機会に新たな飛
躍の節目となり、各支部同窓
の皆様の熱き思いに込めたい
ものと考えております。
「つゝじヶ丘同窓会」の名称
は、自然の美しさや厳しさ、
やさしさの中で、つゝじの彩
りも美しく誇り高く凛とし
て、厳しい自然の中で生きて
いる姿が感じられます。
私は、校地内の丘をこの
「つゝじの花」で一杯にし、時
代を越えても、いつでも我が
高校が「つゝじ」と共に目に
浮かべることができ、自ら誇
れる高校、永く親しみをもて
る高校にしたいものと考えて
おります。東京支部の皆様は
、今後ともご支援・ご協力
のほど重ねてお願い申し上げ
ますと共に、ご健康・ご活躍
を祈念申し上げご挨拶いた
します。

会報発刊に寄せて

東京支部副会長(高女38回) 小西 弥生

会報を発行することは、新
谷会長の永年の願いであり、
私達の夢でもありました。
この度、ようやく実現の運
びとなりまして、嬉しく、感
慨深いものがございます。
つゝじヶ丘同窓会も、西高
と合同で行うようになりまし
てから、今年で早九回目を迎
えます。高女の卒業生も全員
七十歳以上となりました。母
校のことも、遥か遠い昔の出
来事のようにもあり、ついこ
の間のことのようにも思われ
ます。

皆様にはお変わりなくお過
ごしでしょうか。東京支部同
窓会には皆様のご多幸とご健
康をお祈り申し上げます。

最後に皆様のご多幸とご健
康をお祈り申し上げます。



チャチャ登り 昭和30年

創刊号を祝す

東京支部副会長(西高3回) 渡部 久二男

同窓会会報の発刊に心から成と変わり同時に母校も志喜んでいる次第です。輝かしい二十一世紀を迎えまして我が母校函館西高等学校が二〇〇五年には百年の歴史と伝統を誇る上に会報が発行されると言う事は大変意義のある事と存じます。本当にお目出度う御座居ます。

年号も明治、大正、昭和、平

札幌支部の現状

札幌支部 名取 昭 一

前略ご免下さい。早くからのご依頼にも拘らず、平素の不精で原稿が遅れ誠に申し訳ありません。

実は私、昨年札幌支部長を五期生で事務局長を永年やって来られました坂井祥仁氏にお願いし、現在はその職にありませんので果たして適任かどうか分かりませんが、思い出すままを記して責を果たしたいと思います。

私が前任の故山口英子先輩(高女三十回生)から支部長を



昭和31年

た途端に故漆久保一郎君や故三本木六郎君などの幹事から無理やりお世話役を押しつけられたのが実態であります。

同窓会の事など何も分からないうまま、ただ一回生としては僅か一年間の在校期間でしたが、この西高での一年間は一回生の青春にとっては極めて鮮烈な心象風景として深く焼き付けられ特殊な存在となっております。出来ないうながらも何か母校のお役に立ちたいという思いは極めて強いものがありまして、その思いで大役を引き受けました。

引き継いだのは平成五年度からであります。私は昭和三十七年度から札幌に転居し、家業を継いでいましたが、中々余裕がなく、たまさか同窓会に出席しても当時は百四、五十名はいた出席者の大多数は高女の大先輩で男子は十名足らずで大変肩身の狭い思いをした事がトラウマとなり中々同窓会へ足が向かず、極めて不熱心な会員でした。

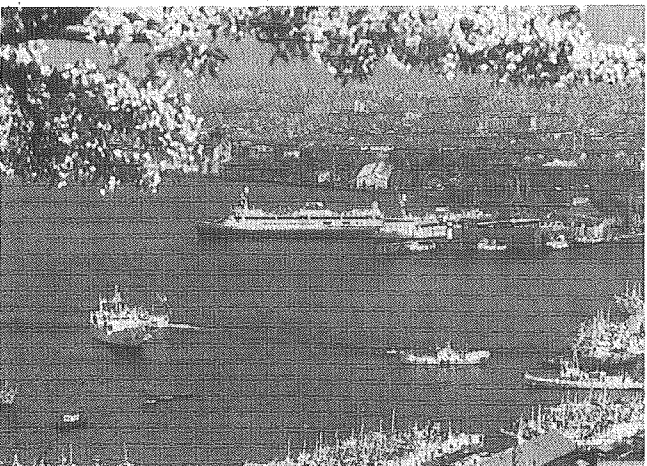
而し年齢も五十歳を越える頃から度々出席する様になつた途端に故漆久保一郎君や故三本木六郎君などの幹事から無理やりお世話役を押しつけられたのが実態であります。同窓会の事など何も分からないうまま、ただ一回生としては僅か一年間の在校期間でしたが、この西高での一年間は一回生の青春にとっては極めて鮮烈な心象風景として深く焼き付けられ特殊な存在となっております。出来ないうながらも何か母校のお役に立ちたいという思いは極めて強いものがありまして、その思いで大役を引き受けました。

座振込に加えて送金料を負担の郵便口座を設け會員の利便を図る。

た。これを他山の石として我々も頑張らねばと思っております。

これを実行した所、十三年度会費納入者は三百名を超え、またご案内数も従来の約半分の六百件で十分との判断が出来、会費収入の増加と経費の節約という大きな効果が得られ財政ピンチは脱する事が出来、今年度から七十歳以上の会員については年会費を免除する事に致しました。貧乏くさい話で恐縮ですがこれが一番の思い出であります。これで財政もやや安定し新支部長にバトンタッチが出来ホッとしております。今後とも會員百五十名総会出席者百名を目標に役員の方々に頑張ってもらって頂いております。それに引き換え東京支部の皆様は活躍ぶりは見事なもので数年前出席した同窓会の余りの盛況ぶりに只々驚くばかりで余りにも違いすぎるそのスケールに圧倒されまし

- (1) 現行千円の会費を千五百円に値上げる。
- (2) ご案内は①年会費納入者
- (3) 会費納入を従来の銀行口座



昭和40年

西高時代を振り返る

東北支部 長谷川 純 男

以前「つゝじヶ丘」に東北支部だよりとして載せた文と重複することもあります。東北支部の様子、及び私の感想について紹介させて頂きま

す。東北支部会は毎年十一月頃に会合を持ち、今年は二十六回目になります。会員は仙台市在住者から始まり、口こみで宮城県内、山形県、福島県、岩手県にも広がり、現在は約百名になっています。実際に会合に参加する会員は二十名前後です。会費の徴収はあり

ません。毎回参加者の会費のうちから少しづつ残した分を通信費として使うようにして、細々とつづけております。最近若い人は少なく、参加者の高齢化が目立ってきました。

会合では、やはり昔の懐かしい話に花を咲かせることになりす。大門や蓬萊町近辺で映画を楽しんだこと、夏は穴澗、立待岬のほか郵船浜でも泳いだこと、授業をサポートしてみなもとで寝たこと、函館

公園の図書館で居眠りしながら勉強したこと、大沼公園の素晴らしい景色をみていると、国内の名所と言われる景色を見ても感動することが少ないこと、など話のタネは尽きませんでした。学校のことでは、庁立時代からのニャンコ、カスペ、西高になってからのキドシン、ゲタ、カバ、ナ

ンコツ、ロング、その他の名物先生を酒の肴にしてみました。また、昔の校舎はなくなり、末広町、十字街、蓬萊町辺りはすっかりさびれ、丸井ビルも廃ビル同然という現在をみますと淋しい限りですが、五島軒、レンカ堂、一二

に森屋などが昔のまま残っていること、金森ビルが復活したこと、などをみますと、函館でも頑張っているところもあるんだと感心させられます。

いずれにしろ、函館から離れて住んでいる限り、青春時代の思い出の地は懐かし、体の動く限りは函館に行くようにしたいと思う気持ちを持ち続けると思えますし、同郷の方々と話することは心からむように思います。

なお仙台では、十四年前に、庁立、西高、函中、中部高、函商、函工、函水、遺愛、白百合、東高、ラサール、大谷などの卒業生による「宮城県函館臥牛会」が発足し、函館市の援助を受けながら、毎年百名前後が参加する同郷会が賑やかに開かれるようになりました。従って年二回は同郷の方々と会って話す機会があります。この為か、つゝじヶ丘同窓会の影が薄くなってきた感があります。

しかし、こじんまりとした同窓会も捨て難い味がありますので、これからも東北支部会は続けて行くつもりです。東京支部の皆様方にも今後のご支援を宜しくお願い申し上げます。

昭和二十八年に卒業してもう五十年を経過した。長いようで短いものである。十月初旬に卒業五十周年の同期会(三喜会)が函館で行われる。又懐かしい顔に会えるのが楽しい。

我等三回生は、昭和八年、九年生まれで太平洋戦争の開戦と終戦を小学生で経験し、成長期の食糧難を生き延びた事もあり、いささか食物に対して執着するところがあるようだ。国民学校が小学校に、そして六、三、三制、男女共学にと教育改革の波の中で育って来た。西高入学時も、庁立高女が西高に変わり、二年生、三年生の先輩は、それぞれ、函館中学、市立中学から地区別に分散して来られた先輩であった。女学校であった為に、男子トイレ、更衣室、グラウンドが急造されたお粗末なものであった。体育の時間は、三年女子とのフォークダンスと、グラウンドの石拾いで時間をとられていたように思う。

卒業してから五十年

関西支部 富士昭一

通学は高足駄に黒いマント、油で光った帽子と相場が決まっていた、足音高く闊歩したものである。クラブ活動も盛んで、野球部の甲子園出場を筆頭に、各部とも優秀な成績を残している。

高校時代はとにかく腹が減って仕方がないのは、今も昔も変わらぬようである。二時間の授業が終了すると同時に早弁となり、昼食時には又空腹となって、女子からパンのおすそわけを頂戴する羽目となる。旧校舍体育館屋上で、白百合女学校の教室を見ながらの早弁はひと時の至福の感があった。

一年三百六十五日のうち、登校しなかった日は数える位で、とにかく学校へは良く行っていたように思う。それは家にいると何やかやと家の仕事を手伝わされる事がいやだったせいもあった。毎日の通学で校舎から見る景観は当時は何とも思っていないかったが、故郷を遠く離れてみると、全国でも類をみない素晴らし

いものであり、つづじの花が一杯の恵まれた環境であったと痛感させられる。青春時代の楽しい三年間を過ごした母校、そして故郷、そのひとこま、ひとこまが次第に甦り、友と会い語らい、思い出に浸るひとは若さを取り戻したような気分になる。人生七十年に至らんとする現在、これから何年友の元気な顔に会えるやら、その時その時を大事にしたいと思っている。

ひよんな事から編集を引き受ける事になり、夏休みをめぐりに現西高校長並びに本支部長に原稿依頼をお願いし創刊号の運びとなりました。発刊にあたり行き届かない面も多々ありますが、号を重ねるにつれ、紙面の充実を図りたいと思えます。原稿をお寄せ下さった皆様に厚くお礼申し上げます。今後とも宜しくお願い致します。

尚、題字は細見紀子さん、印刷はサン・プリントの山崎陽子さん(共に14回生)にお願いしました。皆様のご意見・ご感想をお寄せ下さい。写真は北海道新聞社刊「函館街並み今・昔」より転用させて頂きました。

編集後記

尚、題字は細見紀子さん、印刷はサン・プリントの山崎陽子さん(共に14回生)にお願いしました。皆様のご意見・ご感想をお寄せ下さい。写真は北海道新聞社刊「函館街並み今・昔」より転用させて頂きました。

